

## 奥会津を行き交う縄文・弥生文化

まほろん館長 石川 日出志

【導入】 会津盆地の西～南側に広がる奥会津地域には、縄文・弥生時代の遺跡がじつに多数見られます。奥深い山野と河川が生み出す資源が、人びとの暮らしを支えたからです。そして縄文・弥生時代の人びとは、奥会津の山や峠を越えて周辺世界と盛んに交流していました。福島県域一帯が本格的な稲作農耕社会となる弥生時代の後半になると、この地域から遺跡が順次減少し、後期後半になるとほとんど姿を消します。しかし、奥会津の山と峠を越えて周辺諸地域との交流は細々と続きました。人と物資・情報が低地や河川沿いに行き交う近・現代とは異なる様子を見てみましょう。

### 1. 人・物資・情報の流れ：近・現代と縄文・弥生時代の違い

#### (1) 近・現代の交通路 【A-下】

人と物資・情報は主に低地を走る道路と鉄道で運ぶ。しかし、弥生時代後期から近代までは低地のほかに水運も盛んに用いた。新潟県東蒲原郡阿賀町域は江戸時代は会津領。

#### (2) 縄文・弥生時代は山越えの道も盛んに用いた 【A-上】

### 2. 縄文時代の奥会津と周辺世界

#### (1) 縄文時代中期・後期

- ①. 縄文中期・後期の土器にみる会津—新潟の交流 【B】
  - ・中越の火焰土器や北陸の文様手法が会津に広まる。
  - ・後期初め、新潟の三十稲場式土器が会津にも広まる。
- ②. 土器だけではない北陸・新潟からの影響： 【C】
  - ・縄文中期後葉の福島発達する複式炉は北陸・新潟に由来する。
- ③. 縄文後期初めの「ハート形土偶」は福島界限で形成され、関東に広まった 【D】
- ④. 敷石住居は関東から東北・新潟へ 【D】

#### (2) 縄文時代晩期末（西日本はすでに弥生時代前期）

- ①. 三島町小和瀬遺跡の土偶 【E】
  - ・戦前発見（福島県 1927『福島県発見石器時代土偶圖版』、東京国立博物館蔵。
- ②. 晩期末（浮線文）土器の動きにみる東北南部と関東・中部地方 【F】
  - ・浮線文土器（烏屋式）は会津界限で形成されて関東・中部まで広まる。
  - ・中部（信州）で変容した氷式が会津にまで浸透する。  
⇒ この後の弥生文化の動向の基礎となる。

### 3. 弥生時代の奥会津と周辺世界

#### (1) 前期： 山越えでやって来た西日本遠賀川系土器 【G】

- ①. 遠賀川系（式）土器： 西日本の本格的稲作農耕民の土器型式
- ②. 中部・関東・会津では稲作がほぼ脱落して栽培は雑穀のみ 【H】

#### (2) 前期～中期前半： 再埋葬という墓制の不思議 【I-上】

- ①. 福島県域で発達した墓制： 再葬＝遺骸を複数回扱う葬儀（私たちと同じ）
  - ・ 縄文時代後・晩期以来の伝統の葬法で、遺骨を土器に容れて墓に納める。
- ②. 驚くべき遠隔地との交流
  - ・ 太形管玉の製作地は北陸西部（蛍光X線分析）⇒ 遠隔地物資が流通。 【I-下】
  - ・ 金山町中西部遺跡では北上川流域の土器も発見。 【J】
- (3) 弥生中期中頃～後半： 奥会津に遺跡が急に減少する。**
  - ①. 福島県域に稲作が本格的に採用されたのは中期中頃だが、まだ詳細は不明。
  - ②. 金山町中西部遺跡で発見された平地住居（当時の地表レベルに床を設ける）【K】
    - ・ 直接には北陸～新潟から導入された低地仕様の住居。
    - ・ 北陸系の土器は、会津坂下町中開津遺跡に1点あるのみ。
    - ・ 新潟県三条市内野手遺跡で北陸由来の方形周溝墓に会津の土器。 【L-中】
  - ③. 中期中頃～末：関東でも発見される会津の土器。 【L-上】
    - ・ 関東の初期農耕民のムラで発見される。
    - ・ 栃木・茨城両県域は東北南部の文化的影響が濃厚に。
- (4) 弥生後期後半から奥会津の遺跡がほとんど姿を消す。**
  - ・ 後期後半になると会津盆地の中央に北陸から集団の移住があり、在来の人びとと共同でムラを構える。 【M】
  - ・ 越後山地（福島-新潟県境域）の洞窟遺跡（魚沼市黒姫洞穴・阿賀町室谷洞穴）に北陸・信州・会津を往来する人たちのキャンプ跡が残される。

#### 4. おわりに

- ・ 弥生時代後期後半以後、奥会津は交流の経路として利用されるものの、明確なムラの跡（遺跡）は見られなくなる。
- ・ 東日本各地では、近世（江戸時代）になり山間部の各種資源が商品として利活用されるようになって、ふたたび山間部にムラが形成され、現代へとつながる例が多いようだ。

\* 図の出典は極力図の中に記しました。



(© Google Earthに河川と峠の名を加筆)



(© 国土地理院地図)

## A 会津と周辺地域を結ぶ道（上）と現代の交通路（下）

現代は人と物資を主に低地を走る道路と鉄道で運ぶ。

しかし、弥生時代後期から近代までは低地のほかに水運も盛んに用いた。ところが、縄文・弥生時代は山越えの道も盛んに用いた。



1



高さ30cm

2

高さ34cm



3

中越の火焰土器によく似る



高さ23cm

4

北陸に由来する文様手法

【縄文中期中頃】

1～3・5・6：柳津町石生前遺跡

4：金山町寺岡遺跡

(1～7：『奥会津の縄文』2023 より)



高さ10cm

5



高さ30cm

6



高さ23cm

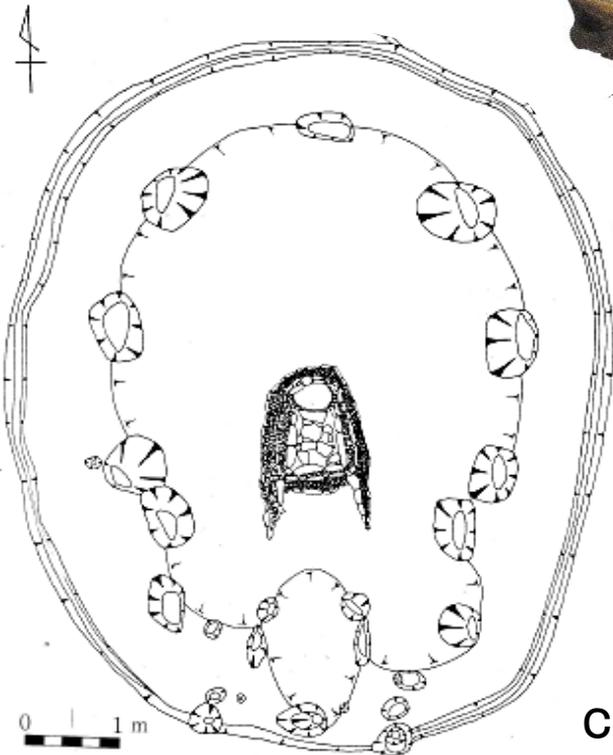
7

7：三島町稲荷原遺跡

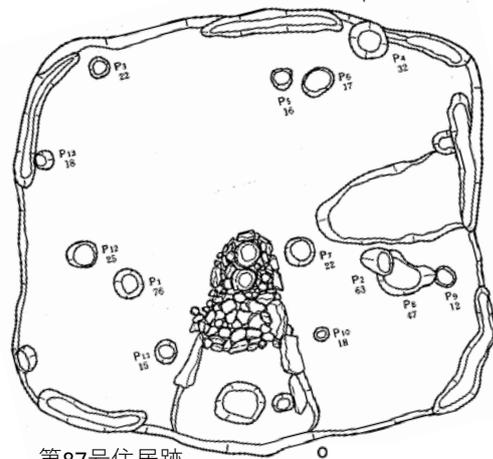
新潟と同じ  
三十稻場式土器

【縄文後期初め】

**B** 縄文中・後期土器に  
見える新潟と会津の交流



0 1m



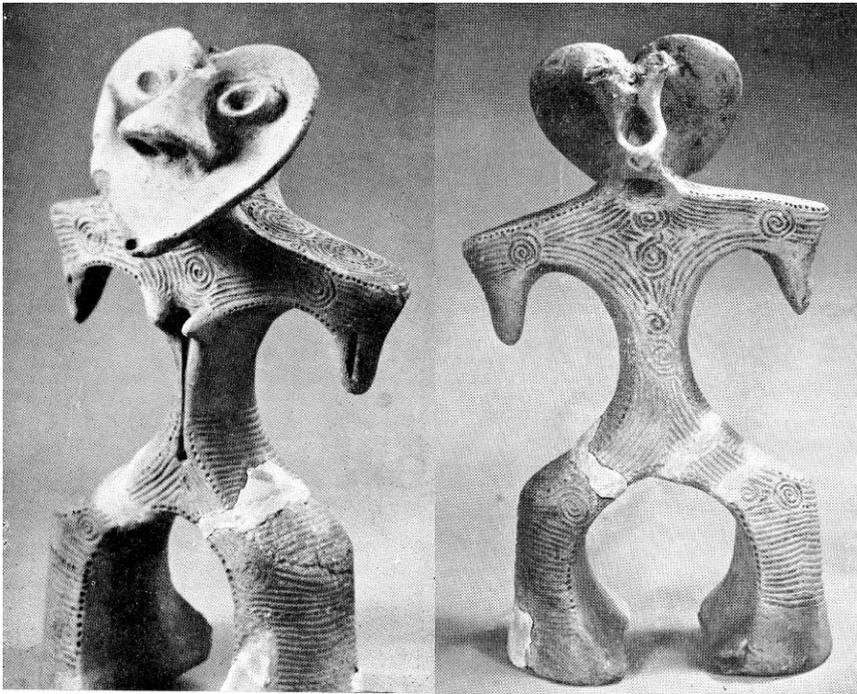
第87号住居跡

0 2m (1/)

猪苗代町法正尻遺跡 (『法正尻遺跡』1991 より)

**C** 北陸から福島に伝わって発展した複式炉

新潟県津南町沖ノ原遺跡 (『沖ノ原遺跡』1976 より)



群馬県郷原遺跡 (江坂輝弥1960『土偶』校倉書房) 高さ30.5cm

群馬と会津のハート形土偶



高さ5.0cm

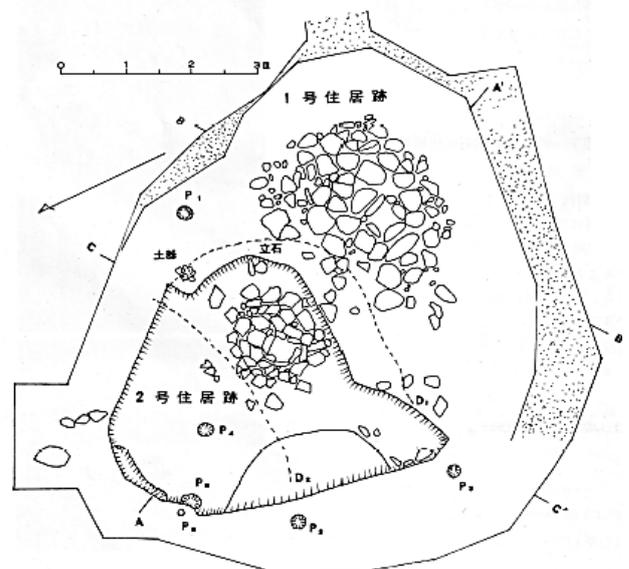
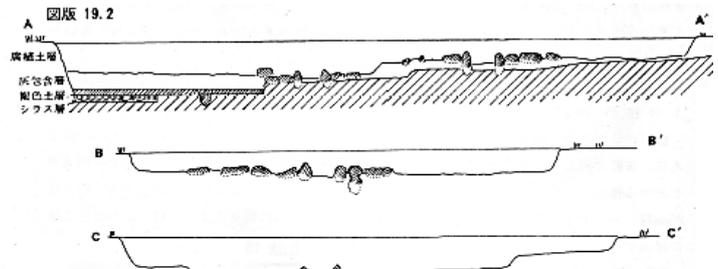
三島町佐渡畑遺跡



高さ6.0cm

三島町稲荷原遺跡

(上下とも『奥会津の縄文』2023)



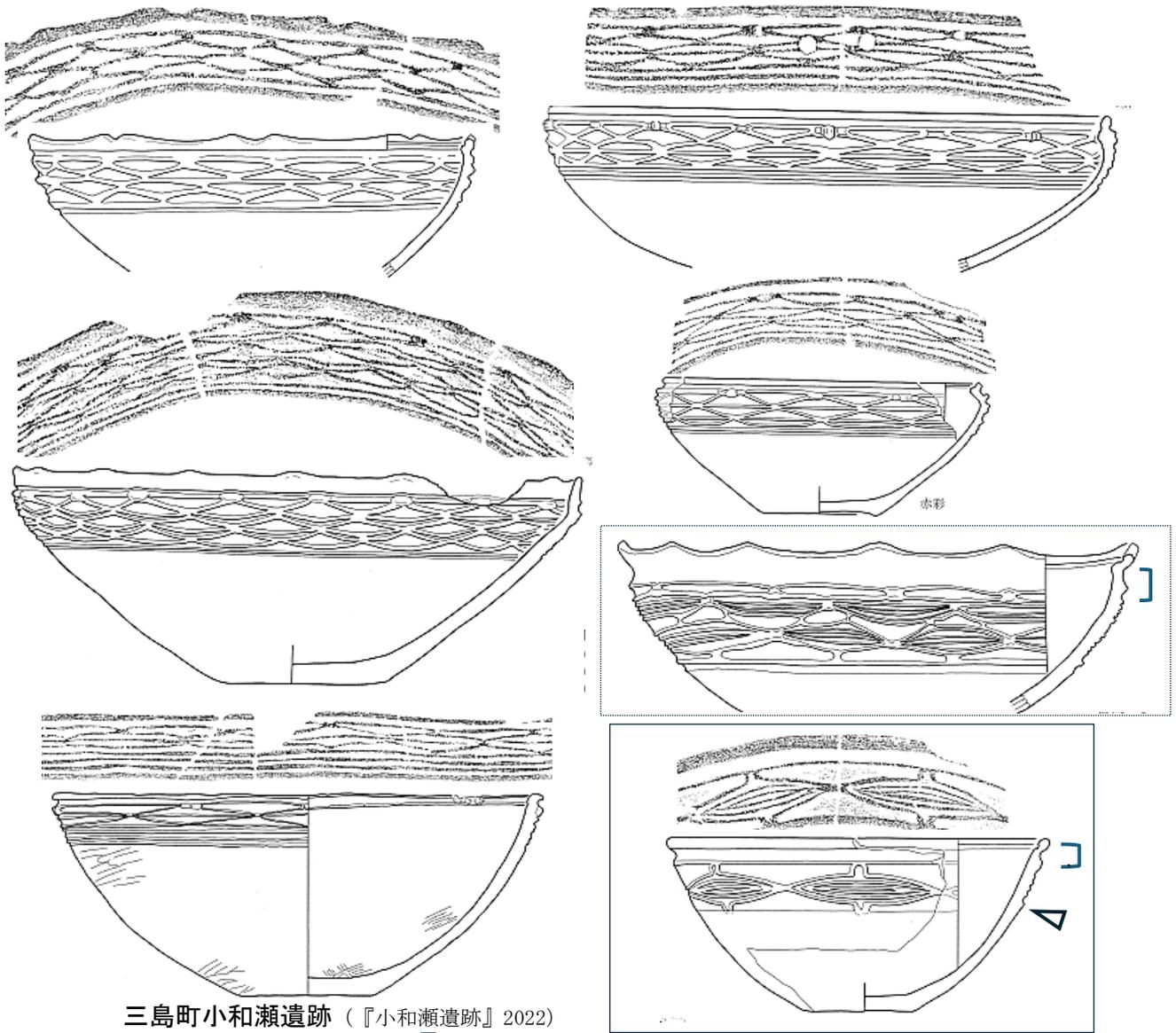
三島町佐渡畑遺跡の敷石住居跡 (『川井佐渡畑遺跡発掘調査報告書 I』1971)

D 関東と会津をつなぐハート形土偶と敷石住居



三島町小和瀬遺跡の土偶（縄文晩期末）

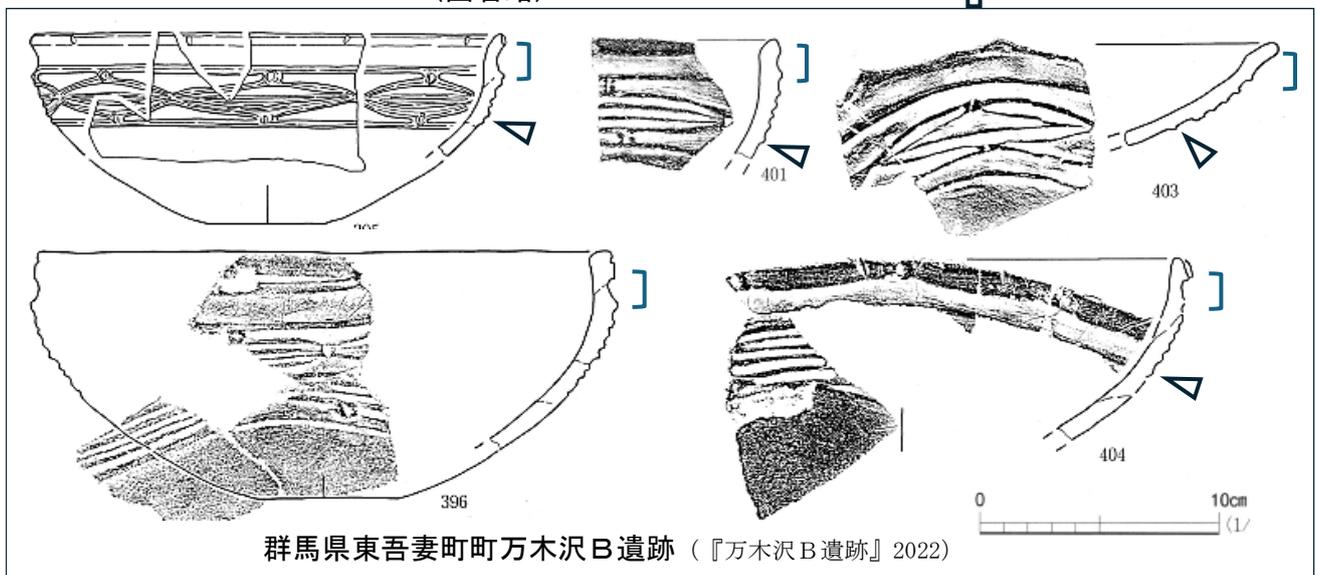
（東京国立博物館蔵／福島縣 1927 『福島縣発見石器時代土偶圖版』）



三島町小和瀬遺跡 (『小和瀬遺跡』2022)

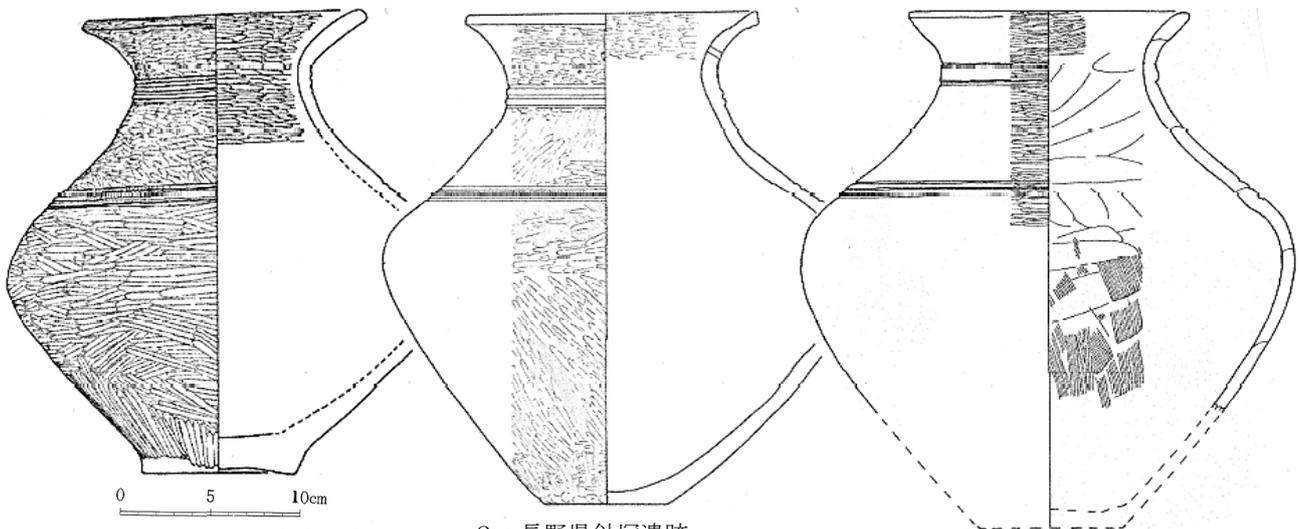
越後・会津の鳥屋式土器  
(図省略)

中央高地の氷式土器



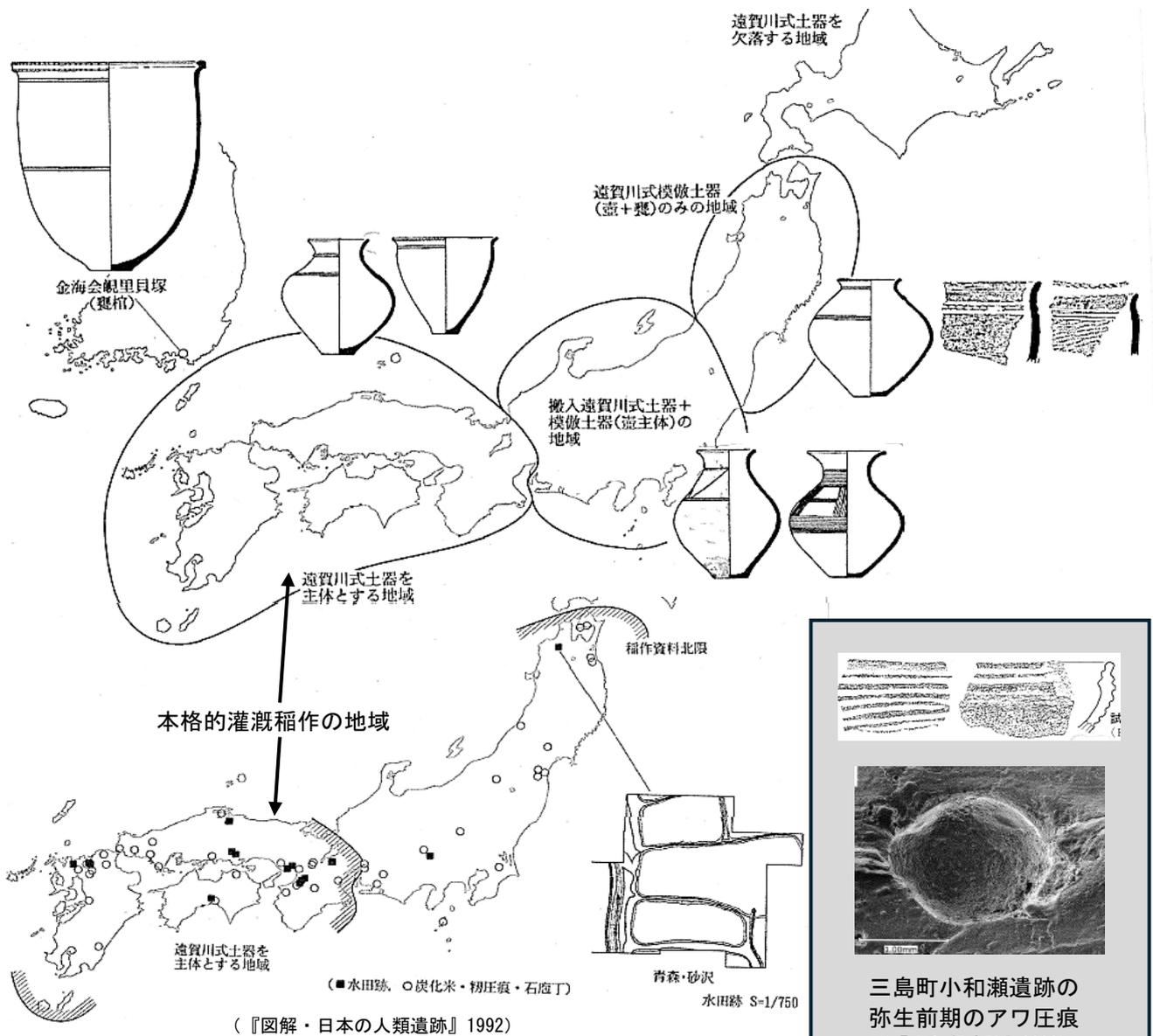
群馬県東吾妻町町万木沢B遺跡 (『万木沢B遺跡』2022)

F 縄文晩期末：関東と会津をつなぐ浮線文土器

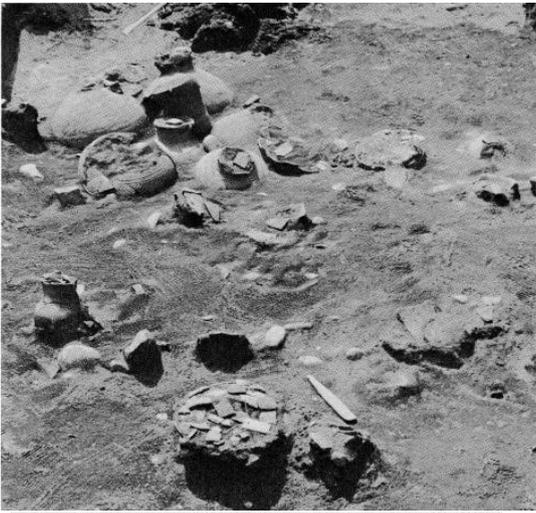


1：愛知県月繩手遺跡 (『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ・月繩手遺跡Ⅲ』)  
 2：長野県針塚遺跡 (『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』)  
 3：三島町荒屋敷遺跡 (『荒屋敷遺跡Ⅱ』1990)

### G 濃尾平野から山越えで運ばれた遠賀川系土器



### H 遠賀川系土器は西日本の稲作農耕民の土器



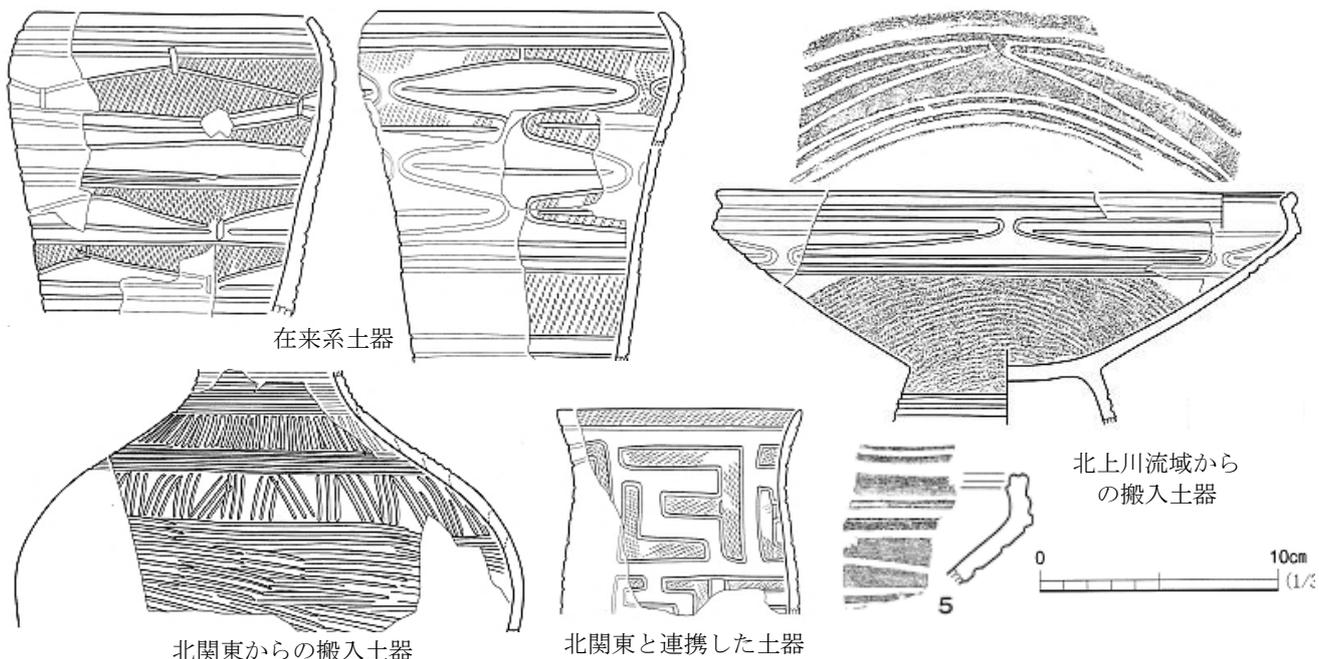
北関東からの搬入土器

第3次調査の一括土器群（『第三次岩代国宮崎遺跡調査概報』1978）

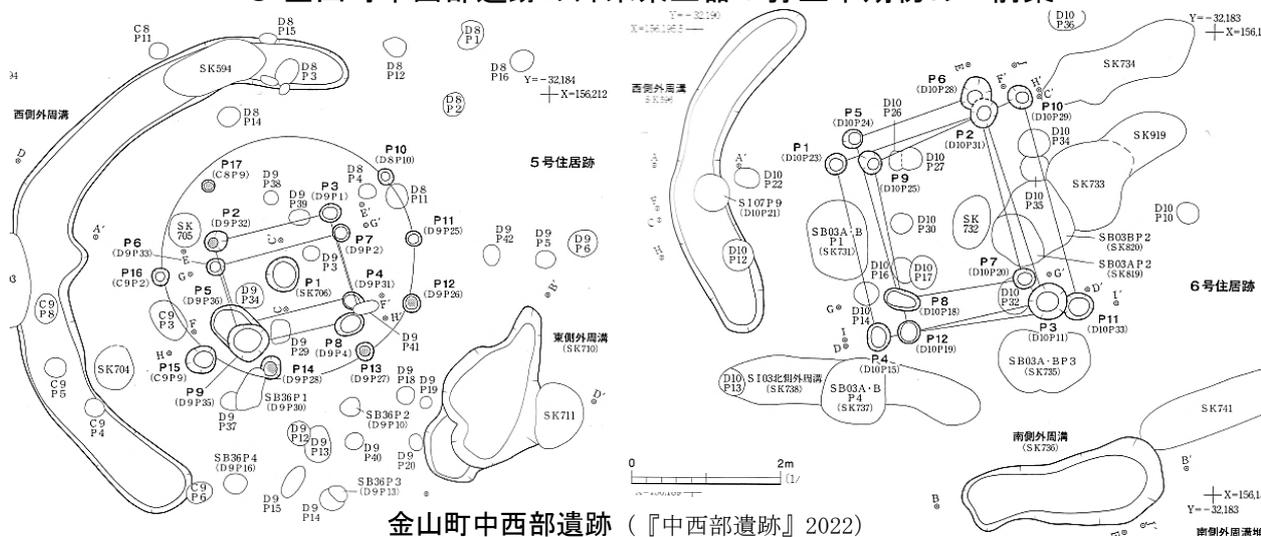


第1・2次調査の破碎管玉（『岩代国宮崎遺跡』1977）：北陸産碧玉

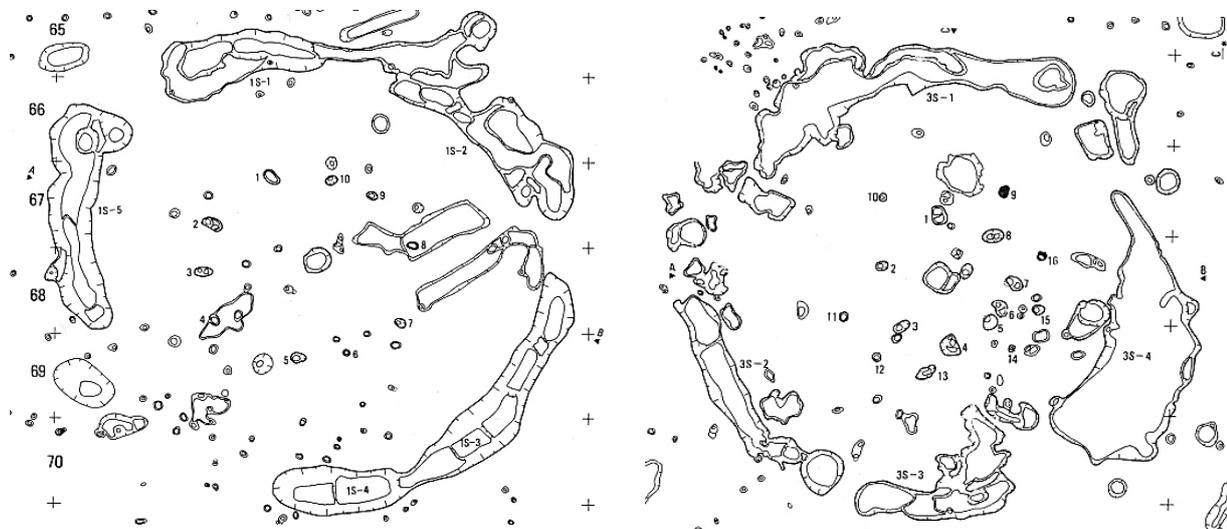
Ⅰ 金山町宮崎遺跡の再葬墓： 弥生中期初めの土器と管玉



**J 金山町中西部遺跡の外來系土器：弥生中期初め～前葉**

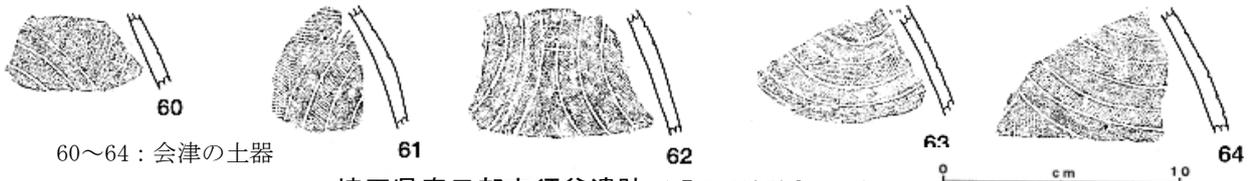


金山町中西部遺跡 (『中西部遺跡』2022)



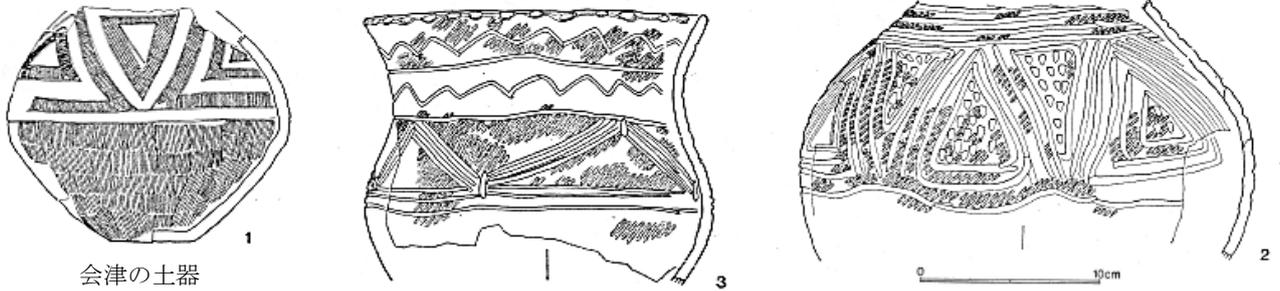
新潟県柏崎市下谷地遺跡 (『下谷地遺跡』1979)

**K 金山町中西部遺跡と新潟県柏崎市下谷地遺跡の平地住居：弥生中期後半**



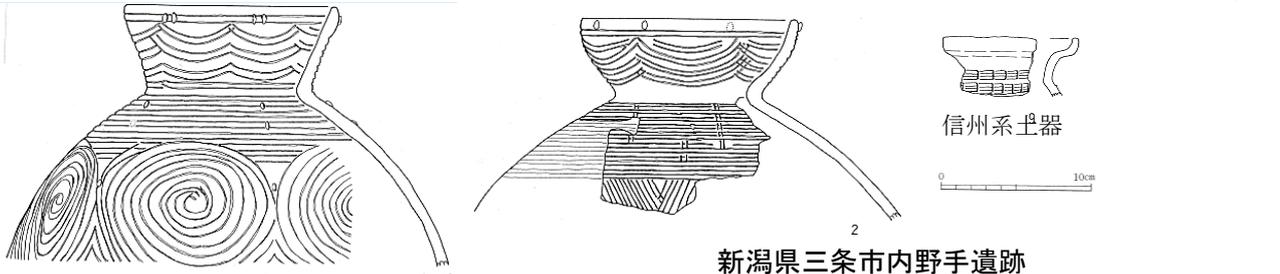
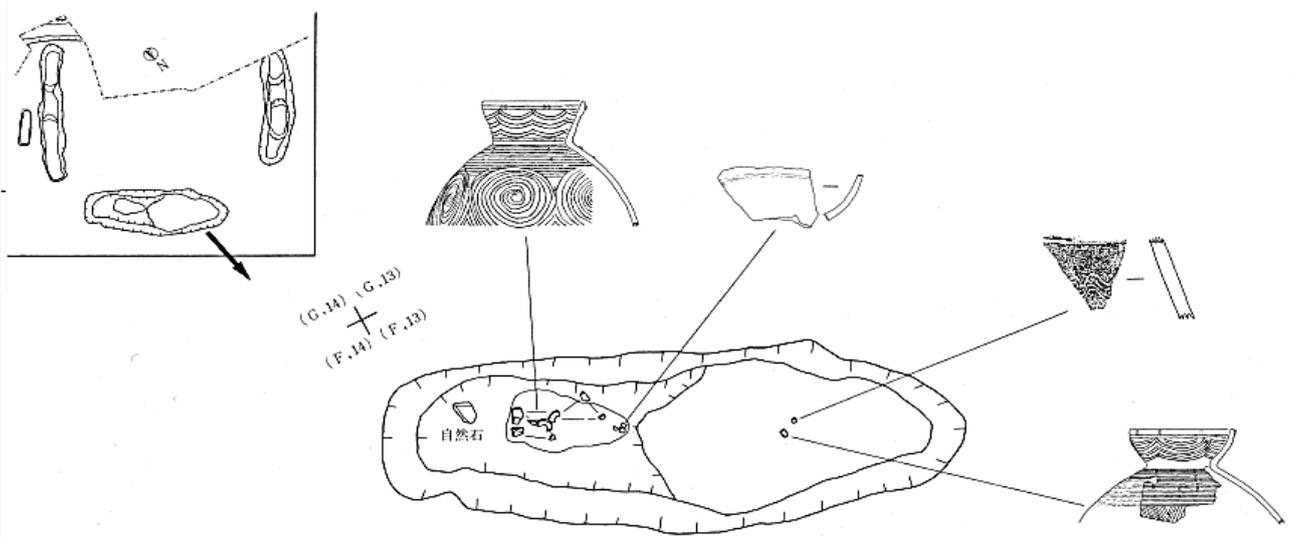
60~64：会津の土器

埼玉県春日部市須釜遺跡（『須釜遺跡』2003）



会津の土器

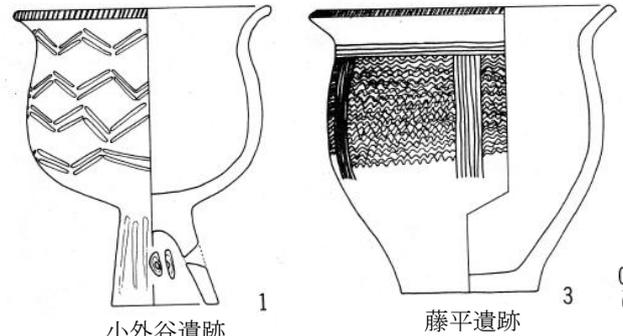
埼玉県熊谷市市池上遺跡（『池守・池上』1984）



1 会津の土器

新潟県三条市内野手遺跡  
（『内野手遺跡・経塚山遺跡』1999）

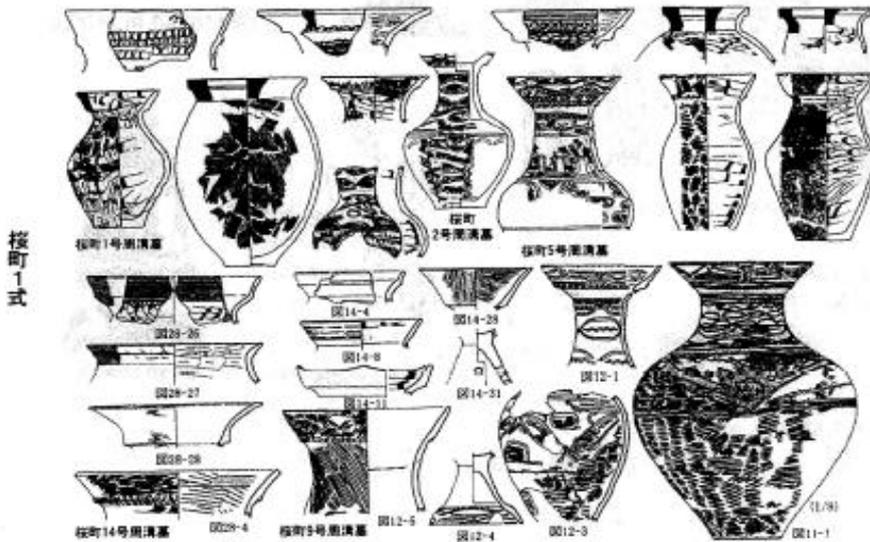
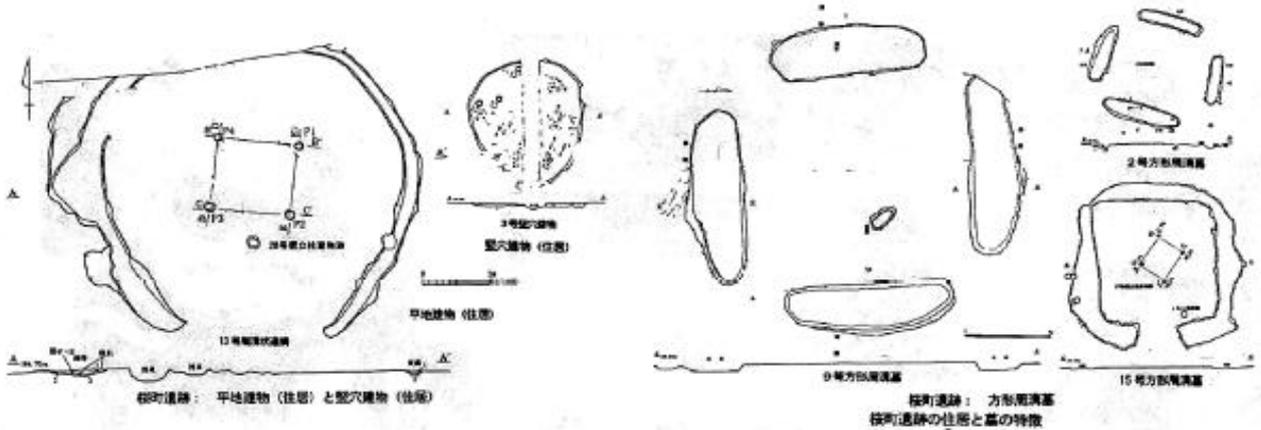
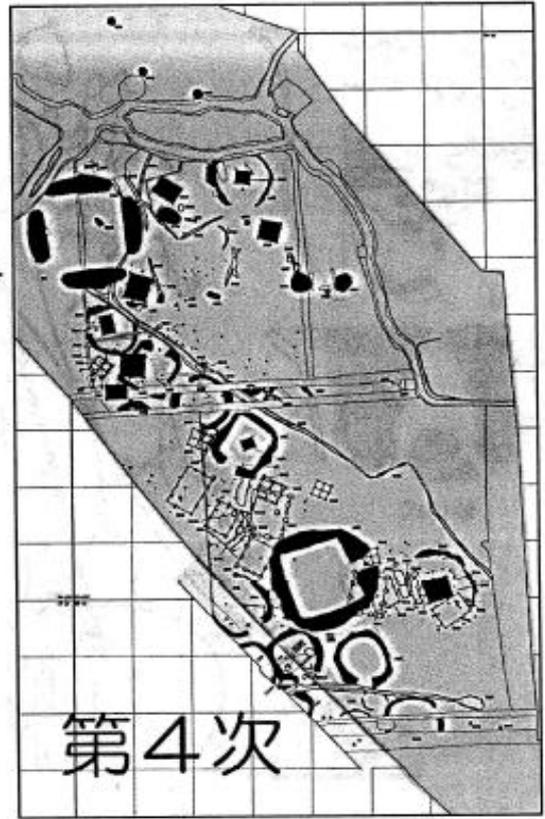
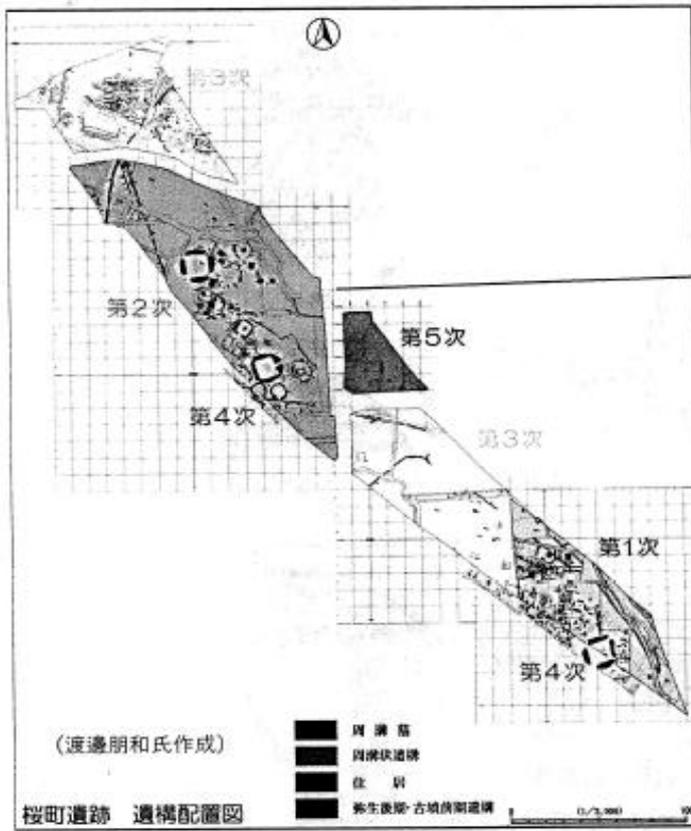
└ 関東・新潟に運ばれた会津の土器： 弥生中期中頃～末



小外谷遺跡

藤平遺跡

参考：三条市（旧下田村）  
の信州系土器  
（『下田村の弥生遺跡』1987）  
\* 西会津町塩喰岩陰遺跡にも



(遺構配置図以外は福田ほか2011)

湯川村桜町遺跡

M 弥生後期後半に激変：河川・谷沿いが圧倒的となる